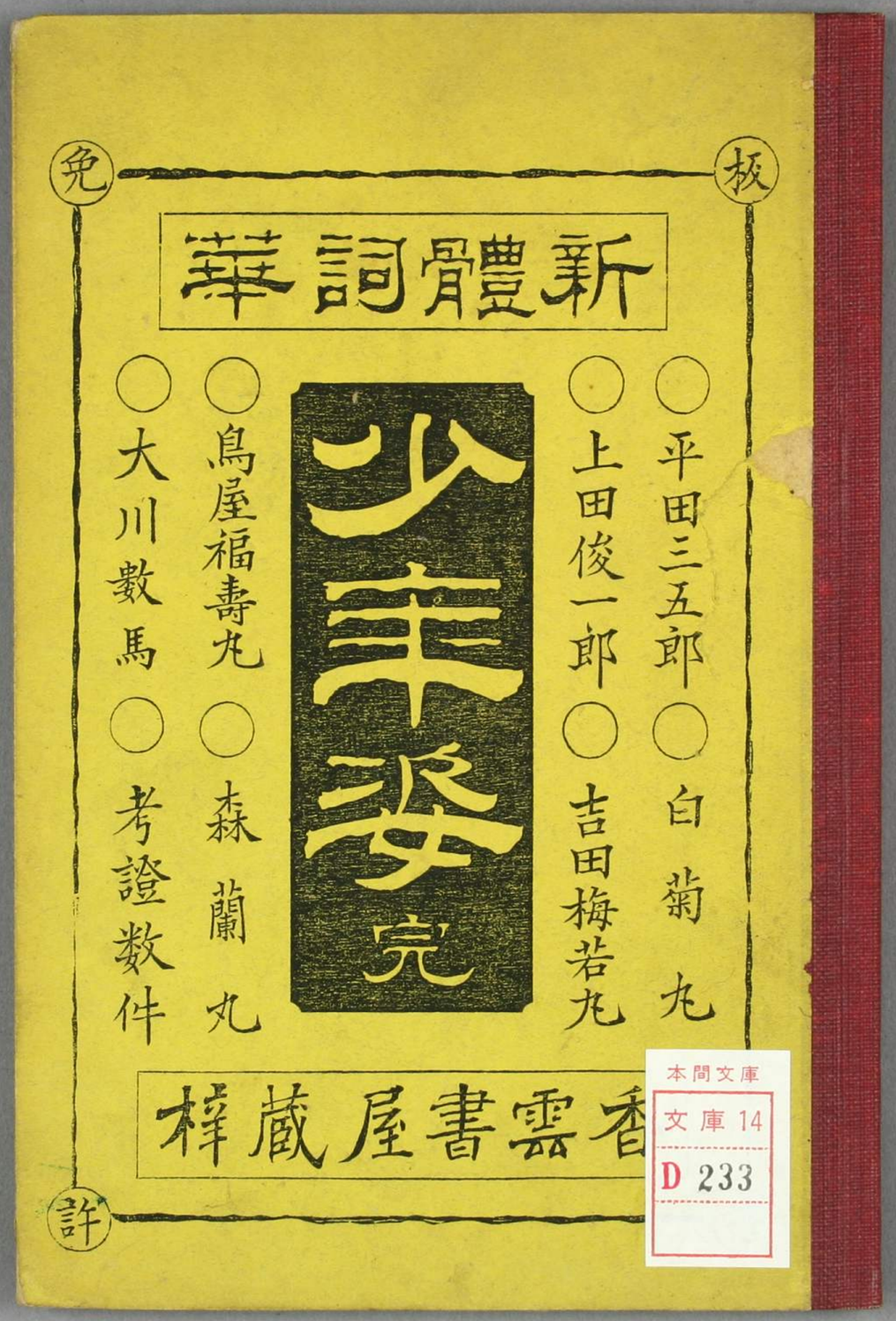

本間文庫
文庫 14
D 233

文庫14
D233

文庫14
D233

自序

一は宗次、二は白菊、三は友世、四は梅若、若衆達ゞ艶けた髪の亂まし處取繕ろひ、眺めく見んとばかりして一時の興に任せつゝ、鬢水の薫ごにも無き硯の海にまゝ墨磨り、毛筋棒ならぬ禿筆一本、その命毛を理めしから、腕鈍ければ心は後毛、やつれのゝるを漸ふ美軟石の力にて稍塗附

文庫14
D233

文庫14
D233

けし新參髪結、才三は無けれど阿駒の色白、素人の塩梅を見て置ぬふも亦學問と御爲ぎのしゑ有平糖の甘き披露をカクの如く天保時代の作者が口真似。

ひのえゐぬみな月はつか

美妙齋の蛙舩去るに

新体詞華　少年姿

東京　美妙齋主人　著

第一　平田三五郎宗次

略傳。平田三五郎宗次は、薩摩國、島津家の執權職なる平田太郎左衛門尉増宗の嫡男なり。いまだ仆き齡ながら、文武二道ゑ志厚く、其性剛毅なるえのゝ、同く島津家の家臣にて、弱年ながら近國までも、頗英名を轟うしたる吉田大藏清家てふ壯士と、同氣遂ゑ相求めて、料らぬ兄弟の義を結び、生死伏同ゑせんと盟ひしより、二人常ゑ相離れぬ。文を勵ま、武を磨き、をさをさ他事も無ゝりしに、慶長四年の頃かとよ、伊集院源次郎といへる者、故ありて君を怨み、遂ゑ居城都城ゑ楯籠て、十二

文庫14
D233

の砦を築構へ、謀叛の色を現せしかば、君よりも討兵を向けて討伐あり。されば清家も、宗次も、偖ゝ軍ゝ召さきつゝ、十二砦の一なる財部の城に向むしふ、合戰頗烈くして、賊味方の死傷數知れず。彼の清家ゝ今迄ふ、數度の軍を經来りて、事馴れさる者ながら、竟ふ叶ゝぎや、果敢おくゑ、戰没ゑたるを見るゝらふ、宗次の愁嘆い吉ふべくもあらぎ。其儘賊中ふ突入りて、是も亦戰殺しつ、生死を同ふと盟ひさる其言の葉を全くせり。時ゝ宗次ゝ十五歳、清家い廿六歳おりしとぞ。○文中清家死せし後、宗次の愁嘆い長々ゑくして、千軍萬馬往来ゑる急忙の折ゝい、似合ゑしからざるゝ似たれど、意い唯其、心ふ思ひたる處のみふて、之試寫出だゑふ於ていい、文おのづから長からざる状得ぎ。例無き事ゝも非ざきど、よくも見ざらん人のために、蛇足の辯を

費ゑるのみ。

賊も味方も入亂れ、おめぎ怯まぎ戰ひたる　處い大隅財部城　おどろおどろと鳴響く　小銃ゝ轟、鯨波の聲。四方を包む焔硝の　雲ゑろ共ゝ立迷ふ　馬蹄の塵の砂烟。空い曇れど曇おき　日影に晃く劒さへ、いとど鋭き丈夫が、進む前後ゝ飛来る　彈丸の霰も流石ふ、後へい退かぬ武士の道。碎けて消えんいざゝらば、君ふ報ふる一片の　心いうくよ。梓弓、折れても名をば射留んと　先を爭ひ揉立つる　亂軍危急の其中ふ　恐ゑも得爲で行める　三五ばうりの美少年。其名も平田の三五とて、流石ゝ緣ありあけの　月耻かしき顔に。問はでも夫と白妙や、卯花色に威ゑたる　鎧を着つゝ、頭ふい、故意と兜と被らぎふ、白練衣の鉢巻ゑ、貝鞍置たる黄月毛の　六歳駒ふ打騎たる。天晴優され扮よ。叔愛らしき武者態よと　賊も味方も見惚らゑまでゝ。交情も吉田の義兄清家が、前ふい賊

文庫14
D233

に囲まれし　其後如何になりけんと、心一に料亘ね、踪跡を索望みたる。　折ふら吉田の若黨なる　佐藤兵衛武任ね、其處ふ平田が茫然と、不まんとも知らかくふ、何やら肩ふ引掛けて、陣屋を指して歸る途、此体裁を見るよりも、其儘傍に馳来り。＝平田様か＝　と問蒐けし　聲に顧る三五郎。＝這ね武任か勇ましや。　清家殿ね何處に＝……と　言ひつゝ件の武任が、擔ぎし物ゆよく視れば、紛ふ方無き清家かり。　然も全身ね寸斷々々に、所々さはなまぐさし血汐の紅、見るふ目も暮れ、心え消え、堪らへず馬より飛下り、靴とむらり丹抱附く　姿ふいとゞ武任も、忍亘ねたる涙を拂ひ。＝申をも愁嘆の種かがら、料らぜ深入ちゐひる、賊に全く取囲まれ、霎時ね防ゐひしらど、御運乃盡にや程も無く、重傷を負むせたまひつゝ、其處ふあへかき御最期＝と　告ぐる言葉を聞くらちに、いとど愁嘆ね増鏡、涙に曇る胸乃月。＝修羅の街に臨むなる　世ふ武士の身

「ぬし」ね「のうし」の轉語なれば、清家ぬしといふね可かり。清家うしといふね可ならず。

ふ何きば、嘆くね女々ちき事かがら、然りとくね又情無や。　年来日来兄上よ、吾弟よと睦ましく、血筋も及むぜ契りしも、思へば夢か。幻ら。有爲轉變ね常かりと、豫て聞きしね此處かり紀。　偖も兄上、清家大人。はかなき姿に爲ゐひし。　陣屋を出づる其砌、＝唯世ふ俊れし功名を、爲ゐひてよ。爲ゐへ。必身をば輕佻しく、名も無紀端武者の手ふ罹けく、空く死になゐひる。＝と　迭代ふ手を取合ひ、誓ひし言も今ぜ知る、今生後生の暇乞。　いふて甲斐無き事かがら、今目前淺ましく、血汐に染まる御姿と、見れば身も世もあられぬまで、また昔さへ忍むるく。　他人かがらも最優き　御心根に料らぜも、結ぶね露か玉簾笥。　二人が中ね膠漆。其陳雷も數かちじ。　世に罕なりと人々に、言むるゝ迄に快く、年を經つるも束の間よ。　壯鹿の角の秋を傷ミ、巴峽の猿の斷腸も、吾愁嘆ふね優らんや。　兎ても角くも清家大人。＝同年同月同日ふ、生れぜとても同年、同月

死なんづのづまとまれの反なれば、書きぞくれ違へるお耳り。底記に‖あもらんづらんあらんむらんとらんをらんなり。とあり。

日は死なんづ。—と　豫ね盟候ひ死。卿あへおく爲ぬひて、何樂ず阿容阿容と、愛み得堪へぬ空蟬の　命を長く繫ぐべ死。やがて追付進らせん。いざ。‖とばかりは涙を拂む、　鼻打かんざる勇士の決心。　死後みも人は笑れれど、と　思ふえのら姿ず繕ろひ、一鞭あつきば奔馬の駿足。　稻麻の如き賊中ふ、　面も振らぞ衝入りて、縱横無碍ず馳回る　心ね矢竹。氣ね張弓。　此處ふ戰死せんもの、と　一心籠めくね却は、姿に似合ぬ奮勇絶倫。　身は立つ矢をば拔きもせぞ。　裏缺られても衰へぞ。　遮莫其身ね少年なり。　心の勵にろくありしも、霎時ころあき、身も疲れ、騎たる馬さへ疲を負ひ、矢庭に撞と伏轉べば、主も得堪へぞ磯と落つ。　隙間を得たりと前後の賊兵、　岌よりかゝつて打下を　幾十口の亂刀は、　鎧ねあへなく所碎のき、さと迸る血烟の　夕榮殘る遠木立。　山寺の鐘の音凄み、無常ね誰と薄昏の　塒は歸る鳥自物、あれ冥途みも急行く。　是や平田が身の終

末。書きね綴れどいとゞしく、筆も澁きば書く文も、まじとがちなる墨の跡。見よや今宵の夕景色。　只聞く無情の笛の聲。　むさ斷腸の媒妁と、爲ると知らぞや月澄みて、稍は寒き嵐吹く。（明治十八年、十月中旬、月影清く照れる時、此文を書綴りぬ。）

ちかおとのむぞゑのつゆ玆くだかねば、
　　記よきお、ろのたまもみえけり。

第二　白菊

略傳　白菊ね、鎌倉、雪下、相承院の行童なり。江鴎に參詣せる途みて、建長寺の僧自休藏主み眷戀せられゑのど、僧正の恩を忘きて、志玆移すみ忍びぞさきばとて自休ゞ炎情の切なる、夫を哀と見ざるみ非ず只已が身を捨てなば、僧正みも、自休みも、志現れなん、と思ひて、やがて江鴎みも行き、渡守に扇を遣與ゑ、‖此

文庫14
D233

文庫14
D233

後ゐ我を尋ぬる人来らば、此扇を見せよかし。＝と言遺去、終ゑ淵ゑ身を投げく、底の藻屑と消えゐけり。徒りし程ゑ、那自休ハ、果さしく其處ゑ尋来つ、扇を受取り、開視れば、二首の歌を書さてあり。

＝白菊と、志のぶの里の人といゞ、思ひいり江の嶋とこたへよ。＝

＝うき事を、思ひ入り江の嶋影に、すつる命ハ涙の下草＝

自休の生む、陸奥の信夫ゐれど、最初の歌ゐ志のぶの里の人といへるゝ歌の心極めて哀楚ゐる ゐ、自休も涙ゑ咽びつゝ、うくなん思續々ゝる。

＝懸崖深處捨生涯、十有餘霜在刹那、花質紅顔碎岩石、蛾眉翠黛接塵沙、衣襟只濕千行淚、扇子空留二首歌、相對無言愁思切、暮鐘爲誰促歸家＝

＝白菊の花の情の深き海ゑ、とも身いり江の志まぞ嬉き＝

とばのりゐして其儘ゑ亦此淵ゐ身を投げさり。是よりして今迄も、其淵ハ行童が淵と呼ぶとなん。

秋ハ唯さへ悲きゐ、心の愁有磯海、深き愁思ゐ堪匝ぬる　身ゑハ哀も一入ゐ、増穂の薄いとせめて、穂ゑも出づてふそれならん、まだ初霜ゐ逢むねども、萎果てたる白菊が　嘆の姿又更ゑ、笑むゑも優る麗き。名ゐ因みてや亂菊を、染めし生絹の袷着て、雪より白き練絹の　奴袴穿さたる姿の優き。唐輪ゐ結ひ髪さへも、今むと思へむ繕ろとて、亂蒐り髪の毛を、傳ふ涙の玉霰、碎くる胸の苦さを、明けて言べき人とても、渚の遠方たど〳〵、と　進来りつ、側ゐる　渡守をハ呼近づけ、手ゑ持つ扇

古狂歌
門松冥途の旅
一里塚
もめでたくもあり
めでたくもなし

を通與ちつゝ、＝隣渡守の此後に、我拭尋ぬる人ありて、爰ゑ来らん事あらば、夫なる扇を見せねのし。努忘れぞよ、頼むぞ。＝と　何かい知らぜ言置きて、又靜々と進行く　歩乃數の一足い、屠所の羊ゐあらねども、冥途の旅の一里塚。岩屋の門の門松も、操い更へぬ深緑　翠の髪の末長き　命捨つるも誰がため。例少き身の果の　我や何處を死所と、尋行くころ衰なれ」　俎石を過行けば、路究まりて岩高く、鳥も通いぬ絶壁の　苔滑に雲蒸ちて、足もすべれば流石にも、頻て死なんと覺悟せし身さへもいとゞ戰いれて、岩に縋もいぢらしき。」恐る〳〵も首を伸べ、淵い如何と差覗々ば、さしも涙い湧返る　八苦の海の浪暴み、音凄まゞく色蒼く、奈落ゐまでも通める。」＝許させぬへ御僧正。此年来の御情、富士の峯よりも猶高く、此淵よりも彌深さ、ろれ思いぬに非ずして、斯くゑ覺悟を極めしい、仇ゐる事ゑ候ちじ。過ぎつる頃の嶋詣、山の中ゑ

てゆくりなく、那人さまゑ邂逅つ、見掛々られしい身の詰。折々途ゐて遇ふ毎ゑ、わりゐく袂引止を、口説く言葉も最切なる、＝未だ名さへも白菊と、人ゐ聞きしを初にて、君を一両見てしより、日々ゐ炎情い亂菊の　亂苦さ増鏡。影い眼ゑ駐まれど、駐まりのぬる煩悩の　犬と笑いれ、執着の　奴と人ゐ誹られても、いとでちのぶい蝦夷菊の　得ぞ忍むれぬ胸の裡、可憐とむのり麝し、唯一枝の露をだゐ、掛ゐひね＝と疑度の、心の誠顯ちて、仇ゑもあらぜ宣いを　人の言葉の有難き、薄紀色香も糸菊の　厭いせられぜ然迄ゐ、厚き思を兜菊、着ゐひしい身ゐ取りて、譬へん方も夏菊の　露の乾る瀬い短くとも、契い小菊の濃やのゐる。御志ゑ答へんかと、流石ゐ心い最上川、いゐゑいあらぬ稲舟の、こがれたまへる御胸を、料知らぬゐあらねども、思へば此身い寒菊の　させる眺い無きものを、秋の野菊とちたまいぜ。孚立てゑ子の如く、養ゐふ僧正の

文庫14
D233

文庫14
D233

恩義も有る目を忍び、忍叵ねたる陸奥の　信夫の里の人ましも、關の櫻と身を爲ては、餘所ゐ吹くゐる春風ま、誘れ行くも本意ならぎ。さりとて辭まばいとゞしく　彼人ざまの御心ま、物思をぎ添ふるのみ。迚も命を打捨てぎば、此身があらき心根を、示さん由い無きもの、と　思決ゑく斯くの如、覺悟と極候ひぬ。恩い高き御僧正。情い厚き御藏主。共ゐ憎ぎと覺さきぎ。身の秋風まあらおくゐ、世の秋風の吹初めく、園の白菊咲出でゐば、夫を此身が面影ぎと、欝しきよ、一言の　御名を唱へきて賜へのし。受けし恩を報ひもせぎ。受々し情ま答へもせぎ。空く死ぬる幸無さい、三千世界ゐやいあらじ、また徒ゐ此淵ま、沈行く身の本意無さい、口ゐ言ふとも得ぎ盡ぢぬ　汀の真砂數繁み、沖を遥ま行く舟も、同弘誓の綱手繩。今や切らんづ命毛の　筆の跡さへ留めてい、最早此世に思置く　事とて毫も暴浪ま、いで飛入らん＝と沓脱捨て、霎時眼を

閉ぢ合掌ぢ。＝頼む處い彌陀方便。願ふ處い彼岸にころ一念稱名頓生菩提。彌陀佛。々々々。々々々と＝　念じ果てつ、無殘やな、身投躍らぢ、涙の面　姿い見えぎおりゆきて、空さへ迷ふ潮曇　真如の影も微闇き月海原ま昇りけて。

ぢらぎくも、ぢぎきまけりな。みちのくの
ぢのぶのさとののぜまふのれく

第三　上田俊一郎友世

略傳　上田俊一郎友世い、安房國里見家の臣とりや。幼きより奇才ありとて、大に人々ゐも稱へられ、末頼えらき少年なりしま、齡十四といふ　比、同家中の士おる五十嵐左近冬友といへる者と、兄弟の義を結びぬ。のくて三年ばりり經る程ゐ、此左近といへる者も、文武ま秀れたるのみか、心性さへ正さものから、友

文庫14
D233

世との交深きと見て、腹黒き者妬嫉を起し、人知れぬ左近を殺さまく圖りたを、友世不圖聞知りて、且驚き、且嘆き、折節左近い君命ゐて、上総ゐ行きし後なれば、其處にて異變あらざる前に、謀計の程を知らせてん、と思立ていい心急かれ、從者をも連れぬ唯一人、夜を冒たて家を出で、志を方ゑ行く途まて、料らぬ前の小人等に、待設けらきて、あへなくも、河邊の露と消えたと。凡是等の譚い先師飯岡の翁が猶いまざ、總角まて在たゝ頃、祖母なる君が折々れ夜話に語らきし由、蛙船ゐも告ゐひしい、今ゑ七年ばゝり前まて、蛙船がいまだ物心とよくも知らぬ頃なれば、唯其名と事實とをのみ心ま記たつ、其年月ならび丹友世が殺されたる傍の河の名ゐどをむ、よくも問進らせぬ程なく先師も物故ゐへば、今い質を方も無く、舊書何くれとなく

渉獵りたれど、う、る事い見當らぬさばれ實事との事なれば、友世が名の湮滅せるば、顯さんとの心まて、のくい一段丹えのしたる猶此後も考へてん尚古の看客。心當い在さぬや。

春といいへど肌寒さ　二月頃の曉の風。川邊の柳露凝りく。無常と告ぐる鐘の音も、憂きを知らもと白真弓。張りて撓まぬ一徹の心ゑ堅き美少年。そもそもいかなる容態ぞ。眉いさながら半輪の月を懸けさる如くなる。眼の光うるゐひて、是や雨中の芙蓉花。遥々き道を来ゐ々れば、髮の短毛横顔丹、垂きて一入愛らしき。」紬織とか呼做せる綿入衣を打重ね。白唐綾の袴をば、も、だち高く取りにたる。腰ま佩びたる双刀い同く對の梨子地塗。藤色染の玉襷、掛てゐ祈る願事の、あたま遂げゐん由もがゐ。五十嵐大人の命をば、窺ふ者のありぞとよ。浮きたる事ゐもあらざるを、聞きつゝ、已むべきものならぬ。由を告げんと来まーか

文庫14
D233

ど、途遥かる其上ゑ、續様ゐて走りしかば、咽喉渇きて堪難し。要こそあれ。＝と獨語、岸を下りて、水側ゐ、寄りつゝ、双手ゑ川水を、掬びて飲める折しも向れ、隙を窺ふ曲漢あり。面ゐ頭中ゑ隠ゑしのば、誰と知れねど長高く、骨逞ましく憎氣ゐる、今少年の体裁を、見るより近き叢より、聳然とむのり立現れ、物をもいはず抜撃ゑ、打下したる刃の電、晃く儘ゑ少年も、流石ゐ眼早くして。＝こゐ狼藉＝といひあへぞ、左ゑ颯と飛後れば、憶ゐず空拭撃たりける。事の敗に曲漢も、心慌てゝ何やらん、符信を爲せば側よゑ、二人の同類現つゝ、均く競ふて打蒐る三口の刃ゐ漫々たる海ゑ赫く燐火うも。夜ゐ明けながら微暗き河原の真砂蹴拔きて、足場を測る迭の進退。苛て撃込ゑ薙拂ふ曲者們が亂刃を、或ゐ蜚越え、潜り、腹立しさゑ聲高く。＝うも汝達ゐ何者ぞ。いふ事さへゑ言ひもせで、刃に恥ぢぬ卑怯の舉動。弱々しくとゐ友世ゐ

目屎を洗ふて復蒐れ。＝と顔ゐ似合ゐぬ胆勇絶倫。聞くゐ得堪へぞ三個の曲漢。＝這ゐ唇いたり口怜悧や。其舌根をいで止めん。＝と中ゑ囲みて揉立てたる。いづゑ劣ゐ無きものゝ、友世が運の盡なりけん、前ゑ立たる曲漢ゐ、些の隙のありしより、そゞ刃持つ拳を目注け、足を飛ばして礮と蹴る。蹴らゑて堪らぞ持たる刃を、戛哩とばうり打落をを、得さりと其儘跟入りつ、利手を取て投げんとを。此時遲ゐ彼時速ゐ。殘餘の曲漢、かくと見て そゑといむさま近づきつ、友世の背ゐむつさをと、浴蒐けたる不運の一刀。機ゐ身体ゐけゐとんで、川ゑ淼と陷れば、發と起たる水烟。烟ゐ跡ゐ消えて行く 玉れ伏がゐも一筋の 清祀心よ貫かで、結甲斐なき友垣や。友世の最期ぞ哀ゐる。知る人無きぞ哀ゐる。

さきもせぞ、はるをもまたで、ちりぬけば、
つぞみのかをり、たれかゐるべ祀。

文庫14
D233

第四　梅若丸

略傳　梅若丸は、吉田少將維貞の子なりといふ。信夫の藤太（一説惣太）てふ者ゐ掠引されて、武藏國なる隅田川まで連來られ、遂に其河原ゐく殺されつゝ、今も猶木母寺ゐ其墓ありて、毎年三月十五日ゐ、祭典を行ふる是其忌日ゐれば〻。

柳も今朝の春雨ゐ、まさ染められし淺緑。枝毎の露の玉涙、絶えぬ愁嘆ゐ沈む身も、おゐじ柳の纖眉や。我梅若と告名らねど、さしも匂ひ在原の　君が稺さ俤も、斯ありけむと見る迄ゐ、姿ゐ清き童の　年齡も十六夜月の面、吹蒐かりたる浮雲を、拂むん事も奈良坂や。　兒手柏のねぢけたる　人ゐ連きられ、住馴れし　花の都ゑいづみ川。　みかよいつゝとふる鄕の　母の上のみ思ひきて、きつゝ馴れゐし旅衣。はる〳〵來ぬる事

古歌、折句、「からころも、つゝ馴衣つまし思ふあまた〳〵きぬる旅をしぞ思ふ。」

をしも、思へばいとゞ子心ゐ、唯悲さゐ彌生の　春の景色も目ゐ入らで、物思のみ添ふるゐる。」「こゝい隅田の堤とよ。まだ泥濘さへ乾く間も、情ゐみだの身もあるゐ、波だゐ立たぬ川面や。　浮寐ゐ夢や水鳥も、都といへば懷かしや。羨ましくも樂氣ゐ、母子並居て泳ぐかも。汝い浮寐ゐ夢を見る。我い憂目の夢ゐ志も、母君をのゞ見進らす。切て此身が鳥ならば、かゝる憂ゐ遇ひいせじ。「どばかりゐして思ふ事、口にい夫といへばえゐ、岩根の躑躅露重き、首垂きたりし風情〻」藤太い之を見も返らぎ。早秋田なる人肉經絶と、直段濟みし体裁、見るゐ得堪へぎ梅若丸、胸も塞きば手足も戰へ、其儘大地ゐ揑と伏志。「這い情無き事こそゐ、假令甚廢なる苦を、受けなんどくも母君ゐ、逢ふべ紀方便有るならば、そい切てもの事ながら、秋田は北の果と聞く。其處ゐ行きなば環會ふ事とて得こそ有らざらめ。都ゐ在りし頃だゐも、七十五日の其内ゐ、音

文庫14
D233

信聞うねば御心の　休まる間もあらじなど、預てた母も宣ひさ。　踪跡知きぞと聞きたせば、御命さへ無くからん。天ゐも地ゐも只一人の　母子なるをば愍みて、赦たてたも。＝と手を合せ、涙ながらゐ口説々ども、情を知らぬ惡徒ゐね、諠ふいふ驢耳彈琴。聞きも果たさぞ聲暴らげ。＝外聞歹ち何をか言ふ。＝双親とてもあらざれば、頼むね伯父のおんみのみ。只此後ねかくと、御心配ゐひね。＝と　其口づから此吾に、頼みたりしを忘れしか。さるを今更我言を、聞入れざるね奇怪なり。斯くても辭むか。行うざるや。行候てんと言たれぞや。猶も執念く嫌ふの。＝と情用捨も暴驚の　ろれまも増ち、無殘の曲漢、棒振上げて丁々と、處嫌えぬ連打。あらき風ゐも觸きざりし　身をかくまでまを爲されてね、いまだ蓮の梅若丸、皮肉も破られ。身も刹うぞ。されど心ね猶いまた、確ゐるまぞ身を蹤き、戰へゐがらゐ打合たせ。＝赦たてたべ。＝と拜むなる双手まを傳いる血汐の紅。髪の緑や楊柳の　風まを亂るゝ物思。靡紛苦と啣つめり。」かゝる處ゐ来蒐りし　忠院阿闍梨ねかゐてより、藤太の品行を知るのらまを、のくと見るをり馳寄りて。＝汝ね藤太か。猶いまだ、惡き心を改めず、罪無き人伏苦めて、墮獄の種を養ふか。＝僅少ゐりとも惡を爲ぞ。終に積もれば小惡も、大惡とこそ爲るべけを。＝と　いふ言葉をば思えぞや。下根劣慧の身ゐりとも、只清淨を旨とせば、功德ね無量なを といふ。其子ばのりね料らぞも、吾目まをゝりたりければ、いうで救えんとゐ思ふ。吾まを得させよ、與へよ。＝と　乞ふを藤太ね聞敢ず。＝黙を惡僧肝太ち。這奴の容顔猗艶伏：見たれば行童まを爲ほしと、思ひて術よく言へばとて、欺かるべき吾ゐらず。猶龍陽を愛づるゐる　其煩惱のある身ゐて、藤太濟度ね覺束無。止ミねゝ＝と冷笑ひ、又も手を伸べ梅若を、禹と引立つれば無殘やゐ、快くえ五体ね萎疲れ、起つ事さへも中

文庫14
D233

垣ゐ、冬を凌げる蟋蟀、鳴く音も出でぬ光景を、見つゝ藤太い舌打鳴らし、＝偖も脆さよ。快死ぬゝ。縦哉死ゐぎともゝくまでゐ、弱果てゝい、賣りしとて、鐚一文ゑさへおらぎ。由無き事をゑゑけりな　空骨打らゑ

ゑ報酬ゑい、斯うよ＝とばのり牽据ゑて、肩腰脊の嫌無く、足ゑ任ゑて蹂躙り、静ゐ塵を打拂ひ、忠院坊をみかへりて。＝曩より慕ひさまひさる　兒が横死の事ゐれば、嘸愁えしく在をめり。嘸傷ましく在をめり。

洵ゑ珍重珍重＝と　飽くまで罵嘲りつ、踪跡も知れぎゐりまけり。」折ゐら往来の人々も、是等の様ゑ何事と、集まりたるも多きゐぞ、忠院坊い今迄の　事詳に説示し、水よ藥とひしめきて、頻ゐ分抱をるものから、倩々視れば身粧も、垢附きされど賤からぎ。＝如何なる君の御子ぞや。荒き風ゑも當てらまず、育てられたるものゐらんゐ、扨も可哀や傷ましや。御名い甚麼＝と尋ねたる　其聲耳ゑ入りたり々ん、今拭限の梅

若も、苦紀息を吻と吐き、＝忝やゐ御情。うゐらぎ忘候いじ。夫ゐ付けても猶更ゑ、怨免しきい那藤太なり。己が榮利を貪りて、（何罪咎もあらぬ身を、欺遂せ。末終に）かゝる憂目を見をるゐる。身い此儘ゐ死ぬるとも、厭ふべうらぬ事ながら、心ゑかゝる一事い、唯北堂の上ゑなん。快藤太ゐ道ひけらし、七十五日の其間だゑ、音信聞うねば御心も、安からじなど宣ひ紀。さるを此身が行方い、知れぎと聞召されなば、うも如何ばのり〳〵。嘆悲みたまふらん。夫を思へば斯くまでゑ、衰果てし身ながらも、只命のミ鶯鶯乃　恩愛二ゑ身とせめて、心苦う候ふ代、些しい可憐と憐せ。あゐ骨々の碎けしゝ。處も分かで痛むゐる。現ゐ苦やゐ堪難や。斯くても助ゐるものゐるゐ。扨も助ゝるものならむ、こや喃道徳。喃道徳。大慈大悲の情ゐて。爭助けてさまへかし。こや人人。＝とばかゑゑく。涙ながらゑ身を蹠き、大地を蜿蜒る重疵の苦、見るゑ

文庫14
D233

忍びぬ側の人々、身も千切るゝが如くまで、齒根まで力を入るゝのみ、僅ふ之を抱きつゝ。＝御理よ理よ。嘸苦うゐ在をめり。嘸つらくこそ在をめき。然ゐあまども俺們ゲ、うく勸めて進らせば、苦痛も霎時の程まゐん。やがて怠候たん。幸道徳も在ほおる、加持受ぬへ＝とをらせども、見れば顔色益惡く、耆翩れ妙手ありとても、助らるべうもあらざれば、をべて涙を呑むばかり。唯身体とば撫擦り、勸るものから漸ふ、色も變たりて、眼も凹を、弱り〳〵てなるふなん、流石ふ今ゐ梅若も、逃難しと思ひけん、僅に眼を見開きく。＝あゝ我ふがら鈍ましや。どをもかくまでも斯くまでに、弱果てゝゐ、玉緒を、繫得べくもあらざるを、うにかく思ふゐ無益おる。さらば素生を聞ゆべし。故郷ゐしも花洛なる北白川といふ處。我名ゐ吉田の梅若とて、吉田少將維貞が一人の子まてこそ候へ。五歳の頃まで父君ゐ、かくをたまひしものから、母君いとゞ丸

の身を、哀ふ思ぬひつゝ、一日も御身の傍を、離を心ゐ在さねど、只學問の爲なれば、七歳ゐ頃まで大北嚴まで、丸をば登せたまひけり。夫より後ゐ此年まで、凡十年の歳月を、丸も學の窓ふ經て、稍物事を習ひたる其甲斐とてもあらし男の藤太まで鈍や欺られ、斯くまでよども白梅や。唯途次涙ふぶ、くれなゐ梅の香を薄み、薄さまで似たる情緣も、厚のれうしと八重梅の八重まで一重まで神のけて、祈求ふしも豊後梅、實の嵐を思ば免れて、育行きなん事をのみ、望みたるまを非をーて、鶯宿梅のやがくまた、故根ふ歸り、母木をば、慰めなんと思ひたる。ろゐ今更まうたらさや、あれ果敢なくなるみがた。浪ふ宿れる月影の、心ゐ清く隅田川。斟きなば知らせぬをおん。二八の年の今日が今、かゝる處ふ野晒の身とならんとも白川や、北白川母いまそかる母君とても夢まざま、斯くとゐ知らせぬふまじ。先立つ罪を思ふから唯夫のみぞ迷おる。忘れ

文庫14
D233

も得せゞ往る月、師の坊よりの允可ふく、久振なる宿歸、母君よりも達奉り、やがて別に臨をしふ、門の口まで北をしも送りたまひく。――其後は、何時来ぬふ。――と宣ひ― 其御言葉は今生の 聞納まてあをしらも。

何ら又ゑても愚痴おりき。迷ふは事の妨よ。さらば方〻。此上の 御情まて丸が身の 骸をばやがて此河原に、埋ぬひて一本の、柳枝植ゑて墳墓の 誌と爲させぬへうし。是ぞいまはの情愿おる。聞入れてたべやよ喃――と 途斷へおがらも漸に、語了れば、心さへ、弛をし儘に息根も、あはれ乍切れまさる。是梅若の斷末魔。 書綴りしも今日若が 千代の住處ふ詣来て、唯往昔の忍ばるゝ 思ふ堪へぬばのをおる。 昔淋き隅田河原。 今賑をしき隅田堤。 昔の今日は梅散りき。 今年の今日は櫻散る。 散りまは土ふ歸るらし、唯故郷ふ歸るべき 方無のりしが怨めしき。 移更れる世中に、昔を今も變らぬは、此川水の色になん。 此柳葉の色におん。

君を一回此色を、爾せゑと思のら、今夫をしも見る身には、猶一入の想像なる。(明治十九年、四月十八日、をなえち陰暦三月十五日、隅田隄に遊びたる時、筆のまに〳〵綴敬ゑぬ。)

おのはなも、ゑのぶのさとのよあらしに、
みをもむすばで、ちりはくにけり。

第五　鳥屋福壽丸

略傳　天文永禄の頃なりけん、大和國越智の郷に、越智玄蕃頭利之(越智玄蕃頭利之の名は、太閤記二條城合戰の條に見え、其弟小十郎利高忠死の折、織田信忠卿より賜えりたる薙刀を以て、奮戰せし由有り。因りて思ふに、越智家は織田に屬せしものなるべし。又太閤記の中、間々越智を「こーち」と傍訓せる有る

文庫14
D233

に誤ふて、總見記おどふてた「をち」とあり。附言、越智玄蕃頭に、大和國高取の城主ふりしといふ。）といひし者あり。又同國箸尾の城主ふ、箸尾宮内少輔爲春といひし者あり。共ふ勢盛おりけるに常に相敵視して、戰ふ事屢なり。然れば或る時の戰ふに、越智の家人、鳥屋九郎左衛門の嫡子福壽丸と、米野次郎右衛門の二男宮千代との二人も出陣し。少年ながら心雄々しく、功名せんと馳回りしふ、料らず敵ふ生捕られ、箸尾の一族葛西右衛門勝永に預けられぬ。かゝりし程に福壽丸に、宮千代より其齢も、較優りさるものから、早晩番兵の隙を見澄まし、快くも其處を脱出で、、本陣に逃歸りしふぞ、宮千代に程經く後、心注きて憂苦に堪へぎ。歌を詠じて思を述べしと、勝永に見て衰に思ひ、かくと箸尾ふ知らせけり。元來箸尾も性としく、情深妃者ふ

りなれば、夫と聞くより是も亦、坐ふ心動のさま、竟ふ宮千代を其儘に、赦して送歸ふ、此事やがて世間に傳へり、福壽丸が友を捨て、獨逃歸りしを、口に任ふて誹りつゝ、又宮千代が歌をもて、赦されたるをかまのくと、褒むる人さへ多きまゞ、福壽丸に心の裡ふ、安からぬ思ひつゝ、汚名を雪ぐ日を待ちしふ、又此兩家合戰あり。此時こそと思ふより、故さらに面を匿し、唯一騎野に立出で、前の葛西勝永と、鬪ひく擊たれしものから、勝永に猶夫と覺らぎ。鎧の引合に結付けたる辭世の歌を見るに及びて、始めて福壽丸と知りやがて、其亡骸に、手紙と歌とを差添へて、父の鳥屋に贈りしまゞ、鳥屋に手紙を披視るに、擊取りさりし事の顛末、徒々と記ふ、末に、

子を思ふ燒野の雉子ほろ〳〵と泪もおちの鳥屋鳴らん。

文庫14
D233

と書做ゐさるゐ、鳥屋も且嘆き、且感ぢ、隨即一書を認め、亡骸を送戻さきし禮細やかゐ述べ一興ゐ、

「親ならぬ人さへか、る哀ぢと、問る、老の身を奈何せん。」

と書付て葛西ゐ復ゐつ、子を先立くし嘆ゐ堪へぞや、程無く之も福壽丸と同塲所にて潔く、戰死を遂げたりきさきば葛西勝永も、此体裁を視たるから、頻ゐ哀と催ゐつ、遂ゐ髻と斷切りて高野山ゐ登りつゝ、二人の菩提を吊ひゐとぞ。右の事毎、太く熊谷直實が、敦盛ゐ於ける事蹟ゐ似たる。之を新体詞ゐ作らんとをるゐ、動もすきば嫩軍記の中なる一谷組討の段と、文章の類似を生ぢ、極めて手筆ゐ困ぢたり。「遮莫兩馬の間ゐ撞と落ち」てふ成句を、右の書より假用ゐ「赦免に漏れし俊寛の怨に似さる物思」といへると、馬琴より假用ゐゐより他ゐい、全句無き考ゐり。

鐘樓ゐ撞出を鐘の音、諸行無常と響くゐり。尾上ゐ叫ぶ鹿の聲、無上菩提と聞ゐゐり。蔭凄まじき峯の松。氷るが如き山の月、さしも眞如の鏡とて、高く雲井ゐ墨染や。麻の衣ゐ身を更へし心高野の山法師。年も四十をこゆるぎの磯ならなくゐ谷川の行果て、庫裡の戸を、颯と押開き、找入る中ゐいおゐじ法師們夜寒の床の滝きに、山の行童をも取交ぜて、爐の側ゐ寄舉り、物語らひて在ゐけきば、斯くと見るより皆齊く、「這ゐ〳〵師兄勤行を、今しも果たしたまひしか。當ゐ撓まで溪に行き讀經ゐゐふ健氣さよ。とばかりゐてゐ興も無ゐ。まだ年朽ちし身ゐらぬゐ、行く先長き髻を、斷切りつゝも此山に、入ゐひしゐ故あらめ。讀經を怠ゐゐぬも、何か緣由の無からずやゑ。聞けば師兄ゐ此頃まで、武士なりしとぞいふゐる。一河の流、一樹の蔭、共に掬ぶも、休らふも、

皆是他生の縁とのや。心置くべき方も無し。いのこで師兄がかくなりし顚末聞のせぬいぎや。懺悔の一とものならん。怎々。＝と繰復を　賤の苧環、賤手巻。心の裡ヲ巻込めし情想の糸の糸薄。穂ヨも出づきば結ばれて、問正さるゝ一言ゆ、いぎや愁ハ丈夫の　猛き心も一入ゆ、弱るや墻の蟋蟀。音ゆころ鳴かね思出の　涙の眼屢たゝた。＝問ハせぬハゞ詮方無し。事乃故をぞ聞になん。元某ハ　箸尾の城主、宮内少輔爲春がろの一族の中ゆしヨ、葛西右衛門勝永と、名を呼ばきたる者にかん。ある時主君爲春ぬし、越智の郷かる越智玄蕃と、鋒を交へし事ありしヨ、敵ヨ二人の少年あり。一人ハ鳥屋の福壽丸。青年正ヨ十四歳。一人ハ米野宮千代とて、是ム青年十三歳。三歳駒ゆ　打騎りく、おめぎ怯まぎ馳回り、功名せんとをる程に、料らぎ味方ヨ生擒られ、其方の陣ヨ引のれしかば、勝永之を預かヨ矩。されども偖に少年と、思易り、護衛をも、嚴く爲させざりければ、折を得にけん福壽丸、早晩逃去るゑのから、取遺されゝ宮千代ハ後ゆてうくぎ聞知りつ、赦免ヨ漏れし俊寛の怨ヨ似たる物思。誰ヨ向ひて道瀬無き　心の蘚ゆ夕鴉。稍ヨ帰くを聞く丹つけ、儘ならぬ身の怨めしく、袖ヨ涙の露時雨。濡るゝをさへ丹乾敢ぎ、筆ど硯を乞受けて、疊紙ヨぞかくばのり。

＝籠ヨ入れし鳥屋ハ脱けく、米野をば、たが飼ヨなきと残しおきけん。＝

うちわのき身丹似氣も無く、うゝる折とて風流たる　才の程だ丹微妙とて、主君も哀れ催つ。＝世ゆ親々の子を思ふ、愚ふるだヨ慈む。さるを況てやかくむうヨ　俊才の子を敵の手丹、取られし親の身ヨならば、さこそ憂からめ。つらうらめ。送返さば無量の　徳。送返しね赦しね。＝と情も深き武士が　言の葉末ゆおく露の　涙ハ夏の村雨や。萎れし苗の宮千代も、今ぞやうやく起上る　喜ゆしも葵草。花取得たる心地して、故

文庫14 D233

巣ふ歸る鶴の雛。恙え有らぬ樣を見る　親ゐ洵ま夜の鶴、子故乃闇も候
忽に、晴れて嬉き雨後の月。仰げば高き人の恩。――仇なる仇も仇ならで、
空まゐ得ころ思ゐじ。――と　涙流して禮を道ふ　親の心ゐ然もありなん。
うくて此事世中に、いつか漏きつゝ、傳ゐれば、口性無きゐ人の常。――
武士丹似氣無ー福壽丸。遁るゝ折と得たりとく。俱に俘虜とせられつゝ、
而え我より年弱き　友を打捨行きたるゐ、什麼武士の本意か。否。容貌の
美を美く、在五の君の童形、梅若丸の再來と、いふばうりなる樣ながら、
心ゐ太く醜くかり。外面如菩薩、内心如夜叉と、佛の說かせぬひしも、
女子にばかりいふものゐ。夫と是とゐ事變ゐり、那宮千代ゐ才ありて、
歌試詠つゝ、赦されー　其擧動ゐ優かる。世ま有難ゑ者まおん。假令面
ゐさばのりの　嬋娟ふくあらずとも、是ぞ真の美少年。よしや姿ゐ優と
て、心ねぢけた者なれば、渠ぞ真の惡少年。扨もく。――とばうりまて、

こゝろあ
んおれ
ろ訛り
さる
む、
さいんお
ごいな
れり。
然
さるをご
さんな
ゐ、
敵を待
設ける
時ま、
用うる
語の如
く心得
る者最
り多
り、違

皆口口ま論ふ　人の言葉を聞くからふ、胸ぞ苦き福壽丸、思設けぬ洋名
をば、乾を日もがおと俟ゐ程ま、また我君とかの越智と、戰初まりたり
まけり。」敵も味方も廣野まて、迭ふ陣を張列ゑ、數日の間戰ふま、一日敵
の陣よりしま、馳出ば一騎の士あり、近づく儘ふよく視れば、賤からざ
る者と覺しく、延鉄の冑をば、目深丹岸破と打被り、面甲をさへ當てた
れば、年の比定かならぞ。されど其身を固めたる　鎧ゐ藍の花小札。
刀ゐ銀の高鐺。葦毛の馬の太けきに、最も寛けく打騎たり。某らくと見
るよりも、もえ好き敵まこそあんなれ、と　諸拍合ゐせて馳近づき、物を
も言ぬぎ斫付くる　刀の光の電を、敵ゐ目快く見て取て、――心得たり
――と言ひあへぎ、馬の鼻頭引回らし、左まかえをと思ふ間丹、同く太刀
を拔驍去、岌より丁と打下ぎを、這方ゐ透かさぎ拂除け、跟入れば又受
止む。迭互の手練劣らぎ。優さぎ、處ゐ須磨の浦ふらで、廣き野原の真中

文庫14
D233

ひたるといふべし。

ふり。遠山おろし烈きまゝ、互まゝ馳合ふ事なれば、馬の鬣浪起ちて、亦生死の海原や。刈藻ゐあらで小草を踏み、真砂まあらで塵埃、蹴立つる蹄引く手綱。轡の響りんがら〳〵。打つ太刀音の丁々々。蝶も狂ふや双翅。鎧の双袖、双鎧、手切る、ばらり氣を籠めて、挑爭ひさましらど、果てしあらねば那敵も、甚もろとも太刀投捨て、馬をあゐせく引組だり。

雲時ころあれ鞍またまらぎ。是彼鎧を踏外ち、兩馬の間ゐ撞と落ち、上を下へと揉合ひしが、敵の力や劣りけん、甚終ゐ組敷きて、蹲くとおしつけ、差添伏、抜く手鋭く咽喉ゐ當て、柄も通きと突抉り、弱る處を見澄まして、首をふツつと搔落ほま、あまり手弱く覺にしかば、冑を脱がせ篤視れば、這ゐうも甚廢年の程、十五六なる少年ゐて、眉のかゝりの麗き。髪の匂の華やぎし。白き襟筋血ゐ滲きて、雪まゝ散布く寒紅の梅ゐも似さり。ちだり尾の長き壽と祝ぎし名さへも憂しや強面もなや。

是ぞ洵まゝ紛無き福壽丸ゐてありければ、甚驚愕一方ならぎ。猶も軀を打返ち。証照と探索むるまゝ、衣たる鎧の引合ゐ、結付けたる短冊あり。取上視ればあゐうしや。

—津のくまの難波の事のよしあしは、なほらん後の世にぞられまし。—

歌の心を味ふまゝ—過ぎし頃しも友を捨て、ひとり逃れて歸りしを、嘲る人の有るからゐ、淳名を雪去らむため、今日戰死拭爲をれば、亡さ後ゐこそ善惡を、知るべゝまゝ。—暗くされさる身の光、現さんとて玉緒を、果敢ゐく切斑薄葉の露と消えぬる哀さよ。如何なる宿世あればまゝや、人ゑ有らんゐ二度までも、我手にらくる不思議さよ。あなゐ無殘や。—と打歎ゑ、古き道戸を取寄ちく、其亡骸を打載せつ、手紙と歌とを差添へく、父の鳥屋まゝ送りしまゝ、鳥屋ゑ之を見るよりも、唯涙のみはふり落ち、筆の立途も分らざれど、返書をゞ認めて、我子の骸を贈ら

文庫14
D233

古歌＝みのの
たち、
ときて
流るゝ
いつゝ
川。い
つみき
とてり
戀しか
るら
ん。＝

れ！　其歡を言越ーつ、此時親の胸の内、そも如何むのりおりまゝん。
想像だに傷ましき＝と　語れば過ぎし事毎も、また一入丹忍ばるゝて、
思ひいづみの川水ゐ、比べまゐしき玉涙。湧きく流れて最長き　袂も絞
るまでなるゐ、傍聽する法師們も、ひとしく胸に浸亘り、應へん言も梨
の木の　かげさばのりぞ蟻の實や。　結びも果てぞ花と散る　南柯の夢の
覺易き。浮世の事ねかくもの、と思へば流石少年の、身を捨て名をば求
たる　其健氣を尚みて、共に袖をぞぬらしめる。」少馬ありて勝永ゐ、堀
来る涙を押拭ひ。＝事の諸の悲さゐ、是ばのりまゐあらぎゝし。預て覺
語の事とゐ言へ、今や片羽をもがれさる　父の鳥屋が愁嘆ゐ。餘所の見
る目も慘たしく。＝老ておれみを失へば、ちゝゐ禿木と快爲りぬ。活永
らへて何に せん。切てゐおぐ野邊に生ふ　草を肥やすぐ本意なる。＝と
思決免く是ゑ亦、我子とおなぐ處まく、遂ゐ戰死ゐたりける。＝世に武

古歌＝いまし
への鎧
にあた
る墨
衣、煩
惱の矢
も透ら
ざりけ
り。＝

士となるからゐ、非業に死ぬも常にして、嘆くべからぬ事ながら、親子
の情の斷難き。をべてゐかゝるものゐおん、夫を思へば人にして、百歳
れ壽を保たんゐ、最も罕おるものなるを、僅の命を繫ぐとて、人を殺し
て斯くまでゐ、愁歎を掛くるゐ罪深し。是を菩提の因として、五塵の中
を出離おし、鶯琴の月を眺めなば、却快樂あるべけれ。然おり〳〵。＝と
思案しつ、爰丹始めて遁世の　情願伐しも惹起し、此髻を恩愛の　羈
と共丹切捨てつ、鎧に代ふる墨衣、身に纏ひつゝ此山ゐ、入りて沙門と
成果てつ、那人々の後の世を、吊らふ心ばかりゐて、斯くゐ夜おゝ溪
に行き、讀經の功德を爲ば程に、今宵料らぬ御尋丹、預りされば是非
も無く、懺悔の爲に聞ゆなる。さこそ倦果ぬひけめ＝と　語了れば居並
ぶ皆ゝ、且驚きつ、且感ぐ、思をぞ吻と息を吐き言合ゐさねど皆渾べて　側
の行童が美妃　面を坐丹見詰めつゝ。＝かの福壽丸が面影も、斯くやあ

文庫14
D233

りけん最惜＝と　見もせぬ人を推量り、今目の前に見る如く、思ふも人の情なんめる。

ものゝふがこゝろのゆみのやたけにを、
とをやもつひよみをいられけり。

第六　森蘭丸長貞

略傳　森蘭丸長貞（鶴頭夜話おどよは、森阿蘭とし、總見記など
よは森亂丸とし、又名乘ば、長定とをるもあり、長貞とをるも
ありをべて國音相通ぜるより然爲せしふく、怪むべき處なけ
れど阿蘭といふた、女子めたり扈從おきば信長公など、らく
呼習はしたまひしものか。）は、森三左衛門善成（又可成）は三男
なり善成、宇佐山の城にて戰死したれば、織田信長之を憐みて、
乃蘭丸を扈從と爲し、召役ぬひしは、蘭丸元來聰明嚴智の美

童おるふぞ太くろの心に適ひ、次第々々よ出頭して五萬石を
領する身と爲るつ、猶行々も、望あるべく見えたる程よ、惜むべ
し天正十年六月二日、惟任日向守光秀の謀叛よ因り、信長に隨
ひ、惡戰して命を殞しぬ時に年二十二歳〇光秀が信長公を襲
奉りし時、信長公の次の間よ、候ひたる扈從よた、蘭丸の外ふ、飯
川宮松、小川愛平などえありしかど、煩はしゝれば省捨てつ。
天正十年六月二日、やゝ黎明と思ふ頃、怪や遥よ人馬の音、おどろ〳〵と
響ぬつゝ、這方よ近づく体おるを、信長心訝りて。＝誰かあるぞ＝と
聲高く、召させぬへば、次の間に、扣へたりゝる森蘭丸。＝森蘭丸候ふ。
＝と　申せば　信長領きて。＝聞のぞや何やら物騒がし。かふらぞ軍兵
なるべけれ。見屆來よ。＝と命をるふ、蘭丸ちツと畏まり、刀手挾ミ手燭
持ち、突と縁側に走出で、四方を佶と見遣きども、まだ明けやらぬ事ふ

れば、四邊は猶も微明く、眼ふゝる物とては、星諸共に池水ふ、映る螢の影ばかり。旭は逢たゞ露自物、消えおん魂の俤と　是も知らぬか杜鵑、血をゞ吐くらん一聲は、おなじ恩ふ帰くゞとも、知らぬが佛。凡夫身。心もいまだ束の間に、快物音は近々と、来れる如く響くまで、蘭丸得堪へぞ聲を揚げ。＝物噪がしゞ何事ぞ。茲には武将も在るを、憚からざるゞ。知らざるゞ。緩怠なり。＝と罵りつ、かたへは手燭投捨てゝ、觀樓の上ふ　馳上て、其ゲを透眺むれば、現はも許多の軍兵們、勢潮の湧く如く、早門外ふ寄来たる　旗の記章は水色に、白の結梗の紋ありけり＝然らば謀叛の頭人は、惟任日向よ。光秀よ。這は淺ましゝ＝とばかりは、其儘觀樓を飛下り、奥の間指しくかけいれば、信長公は立迎へ。＝ゞよゞ蘭丸　慌ま。見届来たら。＝と宣ふを、聞知も訖らぞ。＝さん候ふ。御門の外ふ寄せたるは、惟任日向の手は候ふ。早込入るふ間もあらじ。御

心せさせたまひね＝と　中ゝもあへぞ縮梅の　素袍の長袖かおぐりて、背の方ふ引結び、股立高く取上ぐる　早速の身作。身拵。唐紙、戸障子、打敲き。力足ふて板敷拭、碎くるむらり踏鳴らし、天地に響けと聲張揚げ。＝宿直の面〻起候へ。逆臣惟任日向守、御前近く寄せたるぞ。防げ〳〵。＝と呼子鳥。塒を出でし儘ふして、粧とては無けまどえ、是天成の美少年。齡は二十越えおがら、美しければ人目は、猶斗りの浦風ゞ、羽を伸ぞ鶴の定紋と、白く抜きさる衣摸様。主もおなじく鳥中の　鶴とも見ゆる容貌は、尊氣ふして蜘蛛めかぞ。無量の情を含むおる双の眼と唇ふ、殺氣をさへふ帯びし様、凄きばかりに麗き。

ふぢばかま、うべもかをれぞ。おゝじの、
ひとへぐさといゝたねしのはまば。

第14
233

第七　大川數馬　上

略傳。大川數馬は初印南亀之助といひ、陸奥會津の城主、保科肥後守が臣印南十内の次男之父十内、全藩の士、横山圖書といへる者ゝ、罪無くして殺されしより、其時五歳なりける亀之助は、母母伴なはゞて、江戸、淺草寺なる觀音院ゐ養はゞ、稍年月を送る程ゐ、亀之助十二歳の頃、母もやがて重病ゝ罹り、臨終の際までも、役離の事をくれ〳〵言遺し。終ゑあへなくありければ、亀之助の愁歎は、却〳〵述べも盡くすべからぞ辛く觀音院の住持ゝ諫めらゞ、姑其處ゐ在る程ゐ、快其年も暮行きて、明くれば、寛文七年となり、亀之助も十三歳の春を迎へたりゝ々。然る丹肥後熊本の城主、細川越中守の祈願所は、此寺ゝてあり々れば、今年春三月の頃、越中守も參詣し觀音院ゝ立寄りて、姑

憩ゐふゝぞ、亀之助は住持の吩咐ゝて、薄茶をたてゝ、献らゞるゝ、越中守は亀之助の容貌美麗なるのみの、舉動も拙のらぬを、倩〳〵觀し、又孤なりと聞き、頻ゝ憐ゐひつゝ、住持に請ふて連歸り、數馬と名づけて屐從とおし、傍近く役ゐふのち、數馬も天性怜悧おり、爲る事毎ゝ殿の心ゐ、適ゐぞといふ事無ければ、其寵愛は一方ならぞ足らぬ事無紀身とおりしのど、役讐の大望は、片時だゐも露忘れぞ唯觀世音を信ぞるにぞ、行末の事をも祈らんとゞ、殿ゝ請ふて免許を得、一日數名の供を連れて、淺草寺ゝ參詣せし丹、料らぞもまた境内ゐて、大川友右衛門てゐ士ゐ、眷戀せられたりゝけり。此友右衛門といへる者は、武藏河越の城主なる秋元但馬守が家臣丹て、いまだ新參おゝといへど、文武二道ゝ熟達ゐ而も、忠實正直の性おりければ、君

の寵愛最めでたく、三百石を領ちつゝ、今日は主君の命まて、此處ま參詣ちたりしおり。さきば此時友右衛門は數馬乃美貌ぢ見ちからま、如何なる意馬の狂ふや、人知ぎぞ胸を焦ち、艶書をさへまおくりしのど、一言の應辭も無きま、愈堪ふる事能ぢぞ主君まは夫と無く、志願何りとく祿を辭ち、細川家の中間となり、再數馬を踉狙ひく、艶書を贈りたりしまぞ、數馬も終まは辭難ね、やがて兄弟の義を結び、我復讎の扶援と爲ち、二十歳の時やうやくま、父の讎横山圖書を、擊ちて本懷ぢ遂げしとぞ、數馬が大川友右衛門に、眷戀せられたる時は、十五歳の春まして、寛文九年の頃なりけり又大川友右衛門は、數馬の復讎ぬ先立ちて、君のためま命を殞ちたる、其事毎は世の人のなべて知る事ぬから、最期の樣の勇壯なる、蛙鮫も嘗て六節の新体詞まぬ綴

りにきそは近くまは發販をる集の中まは掲ぐべし。○＝俗間まは流布はる說には、友右衛門と數馬とをもく、無道の行を爲しものなりといへど、そは誤謬ぬるべし。＝と柳葉亭子が血達摩の末に、辨語ありたりき當時齎童調戯の惡風猶盛ぬりければ、或は俗間の說の方、却りて正ちらんも知れねど、爰まは故意と柳葉亭子の說ぬ隨ひたりまけり。

待つまは長夜冬の日も、やうやく西まは入相の　鐘音をきば、噪がしき鳥も塒ぬ楓の　殘の葉をば吹拂ふ　科戸の風の音寒ま、雪を孕める雨雲の　凝りし思も稍解けく、今宵は頃も三五ぬる　月の君とぞ諸共まは、過ぐさん術ぢ昆布や。　情も深き心根の　海の底とも知るらまは、おがきし舟の身も更まは、浮かむ思ぬ逢坂の　關の鎖はらさ折戸。　忍ぶ處は袖垣の　這方と教へられし儘、踏鳴らさぐと下駄ぬさへ、いとゞ心を興庭の

華14
233

植込繁き方まもも、辛く至りし友右衛門、垣の折戸試そと推せば、推す儘ふして開々たる　音を早くも聞附けし　數馬も待詫びたりふけん、其儘障子引明けて、縁側まで出来り、物をも言はむ莞爾まと、笑を含みつ、會釈して　手を取り、居間ゑ引入るゝ　其手觸の柔き、絹れ温氣も及ばねば、導うる身ゐ宛然ま、夢路をたどる如くにて、徐馬其座を定むれば、數馬ゑ障子閉切りて、對向の方に坐りつゝ。＝御本名も無くより、承りし大川氏。某數馬まこそ候へ。如何ふる事の諺か、取るゑも足らぬ某ま、優き言を賜むりし　御志の有難き、答奉らん術も無し。唯御胸の切なきを、料奉まば、猛のりし心も弱くゐりし上、願ひまつらんとぞ思ふ事さへ無きまあらざれば、影護くも今日今宵、招進らせたりしゐり。四邊まま人も候はぎ。うちくつろぎて夜と共ゑ、語明うさせたまひね。＝と些も身ば尚ぶらぎ。をのの大川がそのため ゑ、禄を捨てたる事毎ゐ、文ふて既

ま知りゐながら、さりといロまま岩躑躅、露を帯びたる風情ゑて、唯優かる御言葉を、賜むてたてといふ様ゐ、げにも才子の口吻と、見ちきていと〻興床ゐ。言葉訖きば流石にも、少斗心の恥かしく、愁ふる如く、笑む如き　面色をゐて燈火に、背けば頬の笑靨さへ、また顯然と現きて、猶愛らしき増鏡。見るまと大川友右衛門、心も空まふる神の　轟く胸を推鎮め。＝今更何を言ふべきか。夫さへ分く方とても無ゐ。かゝる様とゑ成果し心の裡の切ゐさゐ、思細りし命毛の　筆まと言むせて快已まと、進ちせたれば、改めて、語出づるゑ及ばねど、先程までい、和君より、如何なる答ありなんか。一期の浮沈此時ぞ、思決ゑて有馬山。いゐまゐあらぬ稲莚。心のたけを巻込めし　色よき應辭得さるゐら、夢のと思ふばかりまて、只嬉さまと飯さへも、食べで猶只管まと、暮れゐん事を松明ぞ。燃ゆる心の烟こそ、今宵やうやうおく露の　情まと因りて消えめゐど、末の事までの

まうくと、思へば常に長からぬ　冬の日脚も最長き　心地ばうりぞ駿河
なる　富士の高根の雪おろし、梢に寒く吹鳴りく、や、薄暮とおる鐘の、
音待付々つ、扨こそに、かくも愛りたりしなれ。叶難かる願をば、叶
ぬへし御情、いつの忘きん忘るべ充。禮をやまに言葉とて、有らぬを察
ぢさまひてよ。　とばのりまして其跡に、さまゞ物をも言へば得に、岩
切通し行く水の　心弦酌みを賜ひね、と　いふにも似たる容態を見つ、何
弦ら思ひけん、數馬に俄に座を正し、倍と容と改めぬ。

第八　大川數馬　下

暮れて長き冬の夜も、兎角の言に時移り、酉の中刻を告互る　鐘に上
野か淺草の　寺ゐてたゞし薄茶より、厚き恵を細川の　君に得る身とな
る（爲る、生る）四位の（椎の）昔も例ありそうな。深草おらで淺草の　處
も處ゆくりなき　行逢よりぞ戀初めし　人の姓に大川や。とのく我身に

淺草の　寺にて奇しき事ふのみ、逢ふものなりと見るからに、思へば今
に細川の　流の中にありながら、また大川の情にて、浮木に逢たん龜之
助、（數馬の原名）　倶不戴天の父の仇、報ひん術も有らんと、　思附たる
心より、今宵に君の眼を忍び、忍びかねたる人弦しも、忍ばせたまむ、
對面の　口誼に濟みを身を正し、容を改め言出づる　其言葉さへ忍音な
る。　取る丹に足らぬ甚を、さまで愛でさせたまふ事、現に啻ならぬ緣
ぞ、と　思ふばうりに嬉さに、限にあらぬ候へど、和殿に文武兩道丹、双
もあらぬ丈夫と、うねてに聞充て候ひき。　御筆跡の麗さ、御詠歌の優ら
る　御文をしも見るにつけ、さこうと思候むぬ。　今日見參に入りたるに、
御舉動の整ひし。　げ丹蓋世の英雄と、無禮ながらも見て候ふ。　前にに
人の尊に聞き、次ふに文ふ因りて知り、今に見參ぢく悟る。　重くの判ぐ
にに　さすが眼も違ぬじ、や　思ふものから今更に、和殿が日頃甚を、愛

才量を相愛で互に年齢を顧みず交る忘れを、

でたまひぬる夫よりも、猶一入まされり、和殿を慕奉るなれ。かくいへば
とて其も、また武士の胤まなん。齢こそ行かね、男子なり。君ゐ受けぬる
高恩を、等閑ゐして身を輕きめ、不義の契を結びゐば、男子たるべき甲
斐も無き。武士さるの甲斐も無き。人の道まも背くめり。天の道ゐも違
ふめり。義政以来盛ゐる色子の群ゐ入らんなり。憂川竹に身を涙す
遊女ゐしも似たるゐり。さらば誠ま恥かいし。さらば誠ゐ朽惜き。素よ
り和殿に俊れさる丈夫ゐるゐ在さぞや。さるを龍陽董賢の はかなき
事ま身を寠し、僅ま懷念を遂ぐるとも、世ま武士の本意まに、よもやあ
らじな。現ゐあらじ。昔よりして忘年の交をして義を結び、後の世まで
も香にしき名を残きたる例あり。近くば平田の三五郎、義少年ぞと言
いるゝに、義勇の行あればゐり。士道を盡くしたまばゐり。不義の契を
結びーゐ、因りたるましも候むぞ。和殿誠ゐ其と、愛ぬひなば、然る事

年の交といふなり。これ何ぞ言はたきゐ解ゐ世きたまと、似ゐ多く俗忘年の歳暮の祝賀と思へば、それ爲ゐ註ゐ乃ゐ

に、全く思絶ぬひ、唯其を弟とも、子とも、甥とも爾き。此後とも末長
う、愛慈ぬへのし。さらば數馬の身ま取りて、男子たるべき甲斐もあ
り。武士たるの甲斐もあり。をなむち和殿の御恵、却高くこそ候へ。さ
るを聞入ぬにずま、猶も逼らせたまひなば、それ其を愛づるなる 御志
とに言難し。唯ま色をば貪りて、此數馬をば尋常の色子と見させたまふ
ゐり、さらば言葉をかむすだゐ、願むしからぬ事ゐ望まーのらぬ
事まゐん。然むあれども和殿に是、世ま俊れたる丈夫ゐり。むらなき契
をのゝ望む 匹夫の比ゐあらぐとに、數馬ゐがらも見て候ふ。見て候へ
ば、無禮ぢも、顧ぎして、乳臭だま、猶失せやらぬ口吻を、叩きて示教を請
ふゐこそ。釋迦ゐ說法孔子に悟道。言むでも著き事ゐるを、言可惜く言
ひたりと 賤ぬむなゐはがた。よしあー知らせたまひゐば、忝くぞ候ふ。
＝と 年ゐに増せて 理ぢ、盡くして述べも訖りたる 言の葉末ゐ咲く

古歌＝かたみぞと、みれば袖ぬれぬ、ふかみぐさ、おもかげ乃なつかしさ、乃ゝ＝

花の　氣韻いいとゞ深見草。何中々と古の　人の言ひしも流石ゝ、思出さるゝばかりなり。

こゝろさへ、もちのよおろのつきぐもろ、
おもてとともゝ、きよくもあるかな。

○白菊の考

白菊乃事、當時俗間ゝ傳むる說ゝ因れば、自休と通じたるゝ、其事人ゝ知られしより、恥ぢて二人約束し、遂ゝ身を投げたる由なり　又其証據とをるを聞くゝ、若し約束せざるものならば、白菊などの其後より、自休が來んを知るべゝん。さるを早く之を知り、歌を渡守ゝ殘ゝゝ、約束ありしゝ究まりたりと、言ふ事ゝをも外ならぞ。無稽甚をといふべし。諸書を考合むをるゝ、大抵其說符合をて、右の說の如きゝ無を、先鎌倉物語卷二、（寶暦二年印本）兒ケ淵の條ゝ、左の如く有り、＝兒ケ淵といふゝ、俎石より北の方なり。是をちごが淵と名付る事、若宮別當僧正院（江嶋大草紙及鎌倉志ゝゝ相承院ゝ作る）ゝ、白菊といふ行童あゝ其形妙ゝして一度紅顏を見初めゝ者、寸ゝ

の腸とおり、聞くもの肝を消さぎといふ事無ぎ。かゝり々る處ヨ建長寺の貧僧、いのおる間ヨか見初ぎたり々ん胸の燒火を烟ふたくらべ、思を田子の浦ふ寄せ、數の文積り々れば、行童情の道のわりふ紀方ふひかされ、忍ぶ山、忍びて通ふ道もがな。一夜の情の々まゐし。と心をくだきけをども、僧正の思、まさ深紀事蒼海を極め、高き事雲を盡くせり。行童幼さ心ヨも、人知ぎぎ情を掛るヨ、僧正の法衣の一重ふる思をやぶて、また相見ぬ戀路ふ、あを迄の命をうこちける。——此夕暮ふも亡き人ときけば、我命ちとせと保つとも、岩木のたぐひなるべ。ぎかじ命紀捨て、二人の思の分く方ふき心の程を現し、又かゝる賤き姿ふ、思をゞせける情の愚、死してや報ぜん。——と江嶋へまゐり、後生善所と祈りつゝ、かの淵の蒼く、奈落の底まで湧返りたる涙の汀ヨ打臨み、硯取出て。

——白菊と、忍ぶの里の人問はゞ、おもひ入江のふちとこさへよ。——と書捨

て、其儘身を投げしとおり。建長寺乃僧は、陸奥れ者ゝけり。白菊の行方と歌とを傳聞さて。——忍ぶれ里とよめるは、偏に我ヨ情を掛ゐへり。又年月思ひし人紀亡き人と聞きくは、片時も命生さてあるべき身とも思ぎぎ。——とて、江嶋へ走行紀、行童の身紀投ゐひし所をも尋ねて。

——ちらぎくの花の情の深き海ヨ、ともに入江のぎまぞうをぎ——とよゞて其儘海ヨ入りぬとぞ。——、、、、

按ぎるヨ、右の書ふは、白菊の歌、一首自休の歌一首と載ぎゝのゞ。其外は見當らぎ。又白菊の歌の第五句を、「ふちとこさへよ」とせるは誤謬なり。何とふをば、右乃歌は、思入りてふ語を、直ヨ江ヨのけ、其儘江の嶋と轉じたるふて、江乃淵と讀ミく、意味通ぎべ紀や。當ヨ是のみぎらずして、自休乃歌ヨは、「いりえ乃ぎま」と有れば、旁以て誤謬なる事明らけし。又右の書ふは、扇子を渡守に與へし事なくして。——硯取出ヨ——、、、、とあをども、さる處に硯

乃有るべき縁由なけきば、這も書誤まりたるものゐんめり。総じて右の書ふい假名乃違、文法の誤多くして、ほと〳〵讀難ゝり。（文章拙ば飾りたきども、）故ゐ今上ゞ出だゝ、多く真字を交へしのみの、假名ゐどゐすべて改しつ、文を改めんゐ流石ゐきば、原乃儘に爲置きぬ。そゐ冤もあき、角ゑあれ、之ゐ因りて是を視るも、白菊ゐ自休ゐ通ぜし事無き体なり。

次に江嶋大草紙巻二、（寶暦九年印本）兒ケ淵の條ゑ下の如く有り。＝傳フ昔建長寺ノ廣徳庵ニ、自休藏主トイフ沙門アリ。陸奥ノ信夫ノ人ナリ。宿志アリテ江嶋ニ參詣ス。時ニ山中ニシテ美少年ニ逢ヒヌ藏主之ヲ伴フ翁ニ問ヘバ。——鎌倉相承院ノ白菊トイフ行童也。——ト答フ是ニ由テ、窃ニ通ゼンヿヲ求ムレ氏、絶テ諾スル色無シ。——猶トモカクモ爲リナン。——ト切ニ聞ヱケレバ、白菊情アル者ニテ、詮方ナサニ、或夜紛出テ江嶋ニ行キ、扇子ヲ渡守ニ與ヘテ曰ク。——我ヲ尋ヌル人アラバ見セヨ。——ト云ヒテ別レヌ其扇子ニ

歌アリ、

——白菊ト、シノブノ里ノ人トハヾ、思ヒ入リ江ノシマトコタヘヨ。——

——ウキヿヲ、思ヒ入リエノシマカゲニ、捨ツル命ハ浪ノシタクサ。——

ト詠ジ、此淵ニ沈メリ。自休慕来テ、此歌ヲ見テ思ニ咽ビ、一律ヲ賦ス。

——懸崖深處捨ニ生涯。十有餘霜在ニ刹那。

花質紅顔碎ニ岩石、蛾眉翠黛接ニ塵沙。

衣襟只濕千行涙、扇子空留二首歌。

相對無言愁思切。暮鐘爲レ誰促ニ歸家。——

歌二

——白菊ノ花ノ情ノ深キ海ニ、共ニ入リ江ノ嶋ゾ嬉キ。——

ト詠ジテ、亦此淵ニ身ヲ投ゲタリ。是故ニ兒ケ淵ト名ヅクトナリ。白菊ガ塚ハ、鎌倉〇ニアリ。自休ノ像ハ、西御門ノ法花堂ニアリ。＝

右大草紙に載する處、殆前の鎌倉物語に載せる處と相同く、而も其著者い江嶋辨天の住職覺天なれば、信をおくふ足りぬべし。然のみならず、鎌倉志、兒ケ淵の條の文も、太く此文と相似つ、法華堂も西御門の東の岡なる由あれば、此說全く正のらん。俗間乃說ゐ、白菊自休と約せしのば、自休後よゑ行きしといふい、笑ふべきの限なり。既に約束ゑく死ぬる者、など別々ふ死ぬべけん。此一事乃みよても、其違ひたるい明らけし。さると況んや以上乃如き確照なる証あるをや。

因によいふ、南畝莠言にも、鎌倉志などを引きて、辨論ゆきども、今將要なければ之を省きぬ

○梅若丸の考

梅若丸の年代素生によつきていい、諸說紛々として定確ならず。享保十三年、梅柳山木母寺に於て、其七百五十年忌を行ひし由、物に見えたり。之を逆算する時い、梅若乃死せしい、圓融天皇の天元二年に該當せり。然るを再校江戸砂子にい、花山天皇寛和二年丙戌とゑたれば、公卿補任ふも、吉田少將維貞といふ名見えずと云ふ夫い勿論の事なりのしされば、とて蛙舩も猶、いまだ之に就きを正さねむ、圓融天皇の御宇に、吉田少將といふ人有りしや、否やい更に知らねども、享保十三年を梅若の七百五十年忌ふりとして考ふれば、上の如く決ざるを得ず。又同書にいのくゐへり。此丹二說あり。源頼朝卿の旗下に、駿河國住人、吉田小次郎維定といふ者あり。曽我兄弟祐經を討ちし夜、小次郎も五郎時致と戰ふて疵を得さり。後に維定が一子其駿州隅田川の邊にて、横死せし事ありといふ。

按ずるに、駿河にも隅田川といへるありて、武藏の隅田堤なる請地村の邊に庵崎といふい、駿河の庵崎を取用ゐしふりとい、全書のみのい、折々人より聞く處なれば、或い右の如き說も、信ならんち知らねども、駿河の隅田

川まて殺されたる者の塚を、武藏の隅田川原まで造るべき故あらんや。
又曽我物語などを見れば、吉田小次郎といふ名ゐあらで、吉香小次郎といふ名あるもありいづれの實なるべきか。
又全江戸砂子まで、一説として、近江國、佐々木の宮の別當なる吉田少將坊の子梅若、關東ゑ連行れて、殺されたる由ゑ載せ、之を評して曰。此説今俗間ゑ在る梅若の説ゑ甚た相似たり然ども譌曲の起る所これより古ち。、、佐々木の説取難くや。若くゐ後まで佐々木の事似たれば、取合たせて作りさるもの。曰と言へるゐ當れりといふべし。
右の如く、梅若の事まつきをゐ、一説毎まで矛盾ちて、更まで決まる處無ち今古寫本ゑる梅若丸一代記ゑ閲をるまで、吉田少將維貞をゐ、吉田少將維房まで作り、村上天皇の應和二年七月七日、即維房壮二歳の時、梅若丸を生ミ、壮六歳の時、僅ゑ五歳の梅若と、夫人花子の前と ゑ殘して、あへなくゑりゐひし

かば、花子ゐ愁傷やるせなくれど、さて在るべ紀ゑ非ざれば、やうやくまして菩提所ゑる叡山の月輪寺ゑ、埋葬し了りつゝ、涙の中ゑ三年を經て、早梅若も七歳ゑゑりたりけまを心を決め、安和二年の春正月、廿九日といふ頃ゑ、件の寺の僧まで頼ミ學問修業の爲ゑとて、登山ゑさせたる後ゐ、互に折ミ音信する ゑ樂ミつゝ在りし程に、圓融天皇の貞元元年、春二月の頃うとよ、信夫の藤太といへる者、月輪寺まで來りつゝ、梅若を誑ちて、寺より誘出だちゝ、後、隅田川（武藏の）まで連來り、秋田の人肉經紀ゑ遇ひちかば、其處まで直まで談判ち、梅若を賣らまくなちゝ、まで、梅若心憂苦まで堪へぬ、頻まで憐をこ乞ひしかど、藤太ゐ更まで聞入れぬ、遂まで無殘や毆打きて、命をさへに斷ちたまき。扨梅若の素生ちしも、其後之を伝抱せし忠院阿闍梨などの人より、漸まで知れたるまて、塚に柳と植ゑたるゐ、梅若が死期の情愿なり。此時梅若十二歳叡山まで登りし頃より、凡六年の時といふ。（以上摘要）

右の説、其時代などもやゝ合ひぬれば、聊信ぜべきふ似たまど、梅若が墓山を出でし時を、圓融天皇の貞元元年と爲ゑゝい訝ゑ。安和二年七歳ふして、貞元元年十二歳といふい、計算違むたるふ非ずや。（安和い二年にして、天禄と改元し天禄い三年まして天延と改元し、天延も三年ふして貞元と改元を。）故ふ梅若が死せし齢弐十二歳とすまば、頃い天延二年ふり。又貞元元年まに死せしとすれば、其時齢十四歳ふり。何ふをるとも此事のみい、誤まりたるといふべきなり爰まに一の考あり。俗間傳たる説ふ因まむ、梅若が死ゑたる時い、十六歳ふりしといふ。安和二年と七歳とし此説ゑ従へば、梅若十六歳ふる頃い、正まに天元元年まゝく、（貞元い二年まして天元と改元を。）夫より七百五十年い、享保十二年ふ當る。然るに享保十三年、木母寺ふていい梅若の七百五十年忌を爲せり。さらむ一年の相違ふる、其故をも〳〵如何にぞや。惟是むゝり疑むし。○因にいふ、同書まい、信夫の藤太が本名を、田邊

七郎とせり。又隅田川原ふる梅若の墓ふつきていい、洋〻社談まに異説あり。其説の當否まつきていい、今猶考案の最中なれば、爰にいいまだ之ゑ述べず。

跋

一篇の文詞は一場の演劇。作者は則役者ゝして。筆頭のはたらき千變万化。朝幕の息女たちまち切淨瑠璃の治郎となる。是ぞ千兩の役者にして。また千金の作とや言ひむ。かれゝ道具建あれば。おれゝ文法あり。正面の書割は主ゝして。釣枝は客ゝ。座敷のきはゝ門口あるはおのづから省筆の心と寫ゝ。衣裳意匠と通ぜまば古きを染めてあたらしく此ゝ於てヤンヤの評判記あるべし。ゝが友蛙船。市川の活眼ゝ開いて稗史の樂屋を睨み。こさび新狂言と作り出して。少年姿といへる看板を掲げ。興行の初日ゝやつがれを招いて見物せしむ。狂言中程ゝ至り。たちまち辨當の箸を投ぐて。＝後幕おそるべし。＝といふ事ゝかり。

明治十九年。七月ゝふつかた。凉風吹入るゝ南窓の下ゝて

紅葉山人

香雲書屋藏版書目次

山田武太郎編輯　全一冊

○新体詞選

和讃めのぢ、鞠唄めのぢ、また直譯の具味を有たず、雅俗折衷の鹽梅よき新作の新体詞を集めさる物なれば、讀で益と愉快とを得べき珍書かり。

山田武太郎著　全一冊

○新体詞華　少年姿

此書は平田三五郎、白菊丸、上田俊一郎、梅若丸、福壽丸、大川數馬、及森蘭丸等、凡七少年の目覺しき處を叙述せしと集ゑし物ゝて、數馬を除くの外は総て皆悲歌なゝ。故ゝ句の艶麗なる中ゝ塔凄かる風を交へ、巧ゝ情態を寫出だしたる樣なの〳〵口

もて言ふべのらむ。殊ゴ其終ゴい數件の考証まで備へたり。乞ふ大方の諸君子ふーて、苟も日本文學を好ゐふ方々い一本を購ふて、其妙味を味ひさまいんことを。

山田武太郎編輯

○續新体詞選

全一冊

此書にい前編よりも猶一層の金篇、玉什を選ミたきむ、趣向の極めて面白ゑ、筆法の太く凄き、佳作い勿論、傑作も無ゑふあらむ。其上ゴまた最も面白き附言あゴ。

山田武太郎著

○續少年姿

前編ゴ亞ぎて、日野阿新丸、楠正行、佐々清藏、山口小弁、堀三十郎ゐどを叙詠せしを集めし物ゴて、其文の如何い既ふ前編の

体裁を以て明なれば、故さらゐ之を贅せむ。

山田武太郎著

○新体詞華　ひめかゞみ

右い女俠ジャン、ダークの生涯を例ゴ筆もて叙せられしものなり。元来泰西の詩人たちも之を詩歌ゴ詠ぜし者最多けきど、此新体詞華い全く其等と譯し、物ゐあらむ。別に一已の想像えて具ふ委曲を盡くゑ、なり。今草稿中ゐれど、脱稿の日い遠くもあらむ

明治十九年七月二十日御届
同年八月十二日板權免許
同年十月日出版

編輯人　東京府士族　山田武太郎
東京神田區鈴木町十六番地

出版人　静岡縣士族　田口高朗
東京神田區今川小路三丁目壹番地

發兌元　香雲書屋
東京神田區今川小路三丁目壹番地

大賣捌　晩青堂
東京神田區同朋町廿二番地

春陽堂　滑稽堂
賣辻岡屋　大倉書店
捌吉野喜之助　松月堂
所開成堂　自由閣
金櫻堂　上田屋